太工
同窓会報
第35号
平成29年2月1日

群馬県立
太田工業高等学校
同窓会
0276(45)4742
株式会社 同窓会事務局

同窓会報第三十五号発行によせて

同窓会会長　大関　貞夫（1E）

同窓会会員の皆様方におかれましては母校を卒業後はご健勝にてお過ごしのこととご推察いたします。同窓会会員の皆様方と共に歩んでまいりました県立太田工業高校同窓会も五十三年が経過しております。振り返れば一九六五年三月（昭和四〇年）に第一期生が卒業して以来同窓会会員数は現在までに一二〇〇〇名強の同窓生の皆さんが卒業され各地域や企業にて責任ある立場に立ちご活躍をされております。なおこの間、同窓会の本来の使命であります同窓会報を発行してまいりました。会報は会員相互の情報交換や母校の状況等を記載して母校と会員の結びつきで有ります絆の役目を果たしてまいりました。以前は毎年発行しておりましたが、予算と会員人数が逆比例してまいりましたので最近では三年に一度の発行を目安に計画をしております。また同窓会の情報等が常に確認できるように公式なホームページ【ホームページURL　http://www.takou-ob.jp】をご利用いただければ大変助かります。なお今後は予算的なことを考慮して何らかの対策を考えなければならない時期が近いうちに来るのではないかと思います。この件に関して会員の皆様方のご意見をいただければ幸いに存じます。よろしくお願いいたします。

会員の皆様方にお願いがございます、今後ともより一層のご支援とご協力を賜りますようお願いいたしまして発行の言葉といたします。

「ほまれは永遠にこだまする」

校長　星野　豊

このたびの同窓会報第35号の発行に際し、誠におめでとうございます。日頃より大関会長様をはじめ同窓会員の皆様には母校発展のために多々ご支援いただき心より感謝申し上げます。

さて、私は昭和58年に本校で新採用となってから教員生活の半分以上、通算で18年間の永きに亘り本校に勤務させていただいております。今から三年前に前任の中野校長先生の後を引き継ぎ、その教育方針を継承して、さらに教育内容を充実させるべく微力ながら学校経営に取り組ませていただいております。

振り返ってみますと昭和36年11月に創立以来、本年度で56周年となりますが、昭和37年入学の第一期生は早くも今年で古希を迎え、つくづく太工の伝統の重みを感じざるを得ません。第一期生は一学期の間、廃校となった金山女学校の仮校舎で過ごした後、夏休み中に未完成ではあったが内ヶ島校舎になんとか引っ越して、二学期から本格的に新校舎での学校生活が始まったと聞いております。また、その三年後の昭和40年には定時制の機械科一学級も開設され、高度経済成長に呼応して太田市広域圏が工業地帯としてめざましく発展・成長を遂げていくための要請に応えるべく、ものづくりを支える人材の養成機関として太工への期待がますます高まっていったのであります。

その後、昭和50年代後半には高度情報化社会の波が押し寄せ、情報技術科も新設され、一学年八学級のマンモス校となるに伴い、内ヶ島校舎での28年間に別れを惜しみながら、現在の茂木校舎に平成元年四月、新築全面移転し今日に至っております。その間に学科改編を行い、現在は一学年五学級で機械系三学級、電気情報系二学級を設置し、二系列でのくくり募集の形態をとっております。このことにより、入学者の底上げと不本意入学という課題の解消に寄与しております。

この歴史的な流れの中で、草創期の同窓生諸氏が各職場で懸命に築き上げてこられた基盤を元に、後発の方々が粉骨砕身の思いで少しでも先輩方を超えようと頑張ってこられた積み重ねがあり、現在の「太工ブランド」が形成されているということを、ひしひしと実感させられております。

現在なお発展し続ける県東部工業地帯にある工業高校として、地域の産業界から次代を担う優秀な人材要望は益々高まっております。校訓「人間性・実力・健康」を常に指導方針の礎として地域社会においてリーダーシップを発揮できる資質・能力を備えた人材育成を継続していく決意です。

昨今、グローバル化や高度情報化による急激な社会情勢や経済状況の変化の渦の中で、大人世代も疲弊し、家庭教育力の低下や地域のつながりも希薄になったことから、生徒に関わる課題も多様化し、それらの問題解決の責任は多く学校に向けられている現状にあります。しかし、教職員が一致団結して「太工を卒業してよかった」と思ってくれる生徒や保護者を増やし、「行ける学校」から「行きたい学校」を合い言葉にして、同窓生諸氏の期待に添えるように、「太工ブランド」を進化させていきたいと願っております。

赴任雑感

教頭　佐藤　幸弘

同窓会役員の皆様には、母校発展のため、平素より格別のご理解とご支援を賜わり厚く御礼申し上げます。

このたび、前任の桒原忠教頭が副校長に昇任され前工に転勤なされたことに伴い、この四月より新任教頭として高高より転勤して参りました。

本校に転勤が決まり、職員録を見て、初任の頃を思い懐かしさを感じました。私の教員としてのスタート（昭和六十一年）である桐工で当時ともに働いた先生方が、何人も勤務されていたからです。また、引継ぎのため本校に来校した際、校長室の歴代校長の写真を拝見し、当時大変お世話になった先生方が何人も本校で校長として勤務していらっしゃったことも知りました。

狩野徳司（第六代）校長は、私が新任教員として桐工に着任したときの校長で、右も左も分からない私に、教員としての心構え等をご教授してくださいました。

長弘之先生（第十三代校長）は、桐工の生徒指導主事をしており、私が担任した元気いっぱいすぎる生徒たちがずいぶんお世話になり、また、ご苦労をおかけしました。

菊地丞示先生（第十六代校長）は、当時、機械科の職員として、一年間だけでしたがいろいろとご指導していただきました。

菅原茂先生（第十八代校長）は、私が初めて担任を持ったとき、ともに機械科の担任として同じ学年団を組み、多くの指導・助言をしてくださいました。

（過去の同窓会報を見ると他にもお世話になった先生がたくさんおりましたが、紙面の都合もあり、割愛させていただきます）

そして、教頭としてのスタートが工業高校であることに、深い縁を感じています。初任と同じ工業高校ということで、当時と同じように感じる部分と、学校が違うからか、時代が違うからか、新鮮な面もあり、日々、楽しく教頭業務に励んでおります。教頭としてはまだまだ頼りない面もありますが、太工の更なる発展のため、尽力する所存ですので、同窓会の方々には、ご指導ご鞭撻いただきたいと思います。今後とも、よろしくお願い致します。

太田工業高校への期待

事務長　斎藤　靖和

三五四号バイパスを館林方面へ向かい、大泉町に入り右に折れると以前の勤務校へ、これを左折すると太田工業高校方面へ向かうことができる。通勤距離もほぼ同じ、通勤だけではほとんど転勤した気分はない。ところが、本校へ到着してみると、なんという規模の大きな学校か、そして、施設も要塞のごとく整然と立ち並ぶ。これが本校へ赴任した時の第一印象でありました。

男子生徒がほとんどの割には、女子生徒の存在感が強く感じられたが、数を聞いてビックリ、なんと全学年で二十名というのであります。やっぱり、強い目的意識を持った生徒は違うのでしょうか。でも男子生徒も負けてはおりません。あの向上心に燃えた眼差しは、やっぱり将来を見すえて、入学してきた者の眼に見えました。

第一次産業革命は石炭で動く蒸気機関の発達、そして第二次産業革命とは、石油や電気をエネルギーとする機械の進歩、それから、第三次産業革命は、情報通信産業と言われております。ところが、近年第四次産業革命なるものが注目されているのです。これはインターネットとＡＩ（人工知能）を駆使して産業を自動化し、今まで人間が行っていた様々な仕事を処理してしまおうと言うものです。

つまり、多くの人員を擁しての作業や規則性の伴う職種等、すべてＡＩが指示して機械が自動で作業する時代が、やってくると言うのです。ではこれからの人々は職業を奪われてしまうのかと言いますと、実は今までの職種とはまったく別の仕事に、就くことになると思われます。具体的には、それらを管理監督する職種や、新たな技術を開発するエンジニア等の仕事などが、これからの主流となるとも言われております。

となると断然脚光を浴びてくるのが、機械や情報、電子等の技術です。このこれからの先進的な専門技術を習得できる学校、そう、我が太田工業高校の社会における役割が、断然大きくなってくると思われます。将来の日本の技術を担う有望な卒業生を輩出することのできる我校は、これから益々世間の注目を集める人気校となることは明らかです。

大関会長様を始め、多くの同窓会会員の皆様方には、これから色々な面で大変お世話になると思いますが、よろしくご指導ご鞭撻のほどをお願いいたします。

また、いつもと同じような道程で帰宅する毎日。しかし、勤務する学校の校風によってこうも気分が変わるものか、太田工業高校に新しい希望を抱いての、新鮮な気持ちがこみ上げてくる今日この頃です。

私たちが拓く太工の未来

前教頭（前橋工業高校副校長）　桒原　忠

同窓会会員の皆様には、母校である太田工業高等学校の発展のため、日頃から格別のご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。また、この度は同窓会報第三十五号の発行、心より御祝い申し上げます。

私は、平成二十七年度末まで、太田工業高校で三年間、教頭として大関会長様をはじめ同窓会の皆様方には、大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

さて、現在の勤務は中毛ですが、私の教員生活の二十年以上は太田が中心で、太田工業が初任校でありますので、人一倍この太田の地に対する愛着と思い出があります。

生徒と一緒に社会科のフィールドワークに出掛けた塚廻古墳や天神山古墳、金山と例幣使街道の南を走るマラソン大会等、今も変わらぬ田園風景、全てが懐かしく思い出されます。アテネオリンピックが開催され

た二〇〇四年のある日、卒業生を送り出して、十年後に生徒の母から、手紙が届きました。息子が結婚した嬉しい知らせや転職の際に会社の上司の方から何度も手紙を頂き感謝に堪えないことが綴られていました。この手紙を読んで、卒業した生徒たちは、地域や地元企業の先輩方に支えられ、生きていることを実感するとともに、ものづくりはひとづくりから始まることを改めて教えて頂きました。

そんな便りの中で、本人が高校時代の反省として、今になってやっと分かったことがある、と言います。言い換えれば、卒業から十年後の元生徒の後悔です。その後悔とは、ひとつでも多く資格を取るべきであった、と言う反省です。

資格取得への挑戦は、知的好奇心を喚起し、生徒が主体的かつ指導者との信頼関係の中で築かれる協働的な学習活動の一面を持っています。今日の二十一世紀型能力の育成とされるアクティブ・ラーニングがそれです。

今、日本の教育が変わろうとしています。教員の指導力が問題ではなく、生徒の学びの深さが重要とされています。当然ですが、生徒の言葉に耳を傾けなければ、教育は成り立ちません。リオに続いて、四年後のトウキョウ、それはオリンピックだけのことでは無さそうです。

かつて、「経済一流、政治は三流」と世界から揶揄されたニッポンで、十八歳選挙が実施されました。全国で「公民」や「総合的な学習の時間」等を通じて、政治的教養を育むための教育が求められています。戦後の選挙制度にとって、また将来のニッポンにとっての大きな転換期を迎えたことを意味するように思います。

将来に役立つ資格を生徒自らが意識して、目標設定し、計画・実行する。そして、結果を素直に受け止め、努力や喜びの素晴らしさを味わうことが、高校時代にできる実行力のあるキャリア・アップではないでしょうか。是非、これからも太田工業で資格取得に組織的に取り組み、生徒の喜びを引き出す指導に、諸先輩からもご支援の程よろしくお願い致します。

初任時代から、そして教頭三年間星野豊校長先生にはいつも優しくご指導ご鞭撻を賜り、感謝致しております。校長室のシクラメンは不思議な程生き生きとして、綺麗な紅色の花びらを沢山、今も付けていることでしょう。花のお世話を拝見しながら、それと同じくらい、生徒に対する深い愛情を一緒に感じていました。生徒や先生方に対して、常に誠実で真心を持って接し、私にとっては貴重な時間でありました。横浜開港資料館でのコーヒーは、大変美味しかったと記憶しております。ご馳走さまでした。

終わりに、太田工業の益々の発展と、大関会長様をはじめ同窓会の皆様の変わらぬご支援をお願いできれば幸いかと存じます。

創立記念講演
「自身の経験におけるものづくりと技術について」を振り返り

加藤　貴洋（26M）

卒業以来の懐かしい母校、平成二十七年度創立記念に当たり「自身の経験におけるものづくりと技術について」という題目で講演をさせて頂きました。当日は、恩師であります中野先生（前任校長先生）、星野校長先生を前にしての講演となり、大変緊張し、在校生の皆様にキチンとお伝えする事ができたのか不安が残りましたが、この度の同窓会報発行に当たりまして、寄稿の機会を頂きましたので改めて講演の内容を振り返りつつ、お話しさせて頂きたいと思います。

私は一九九〇年に卒業しました新校舎卒業第一期生であり、三角屋根の体育館でおなじみの内ケ島校舎からの”ヤドカリ引越し“年代であります。卒業後は太田市新道町にあります株式会社イチタン（旧第一鍛造㈱）という自動車向け鍛造部品製造会社へ入社しました。技術部門で鍛造品の設計及び、それをつくる為の金型設計部門に十二年程従事し、生産技術部門、製造部門、生産管理部門といくつかの関連業務の経験を経て、再び技術部門に戻り九州にも展開しておりますグループ会社も含めまして、新しい製品や新しいものづくりを実現するべく、仕事をしております。

入社二十六年、一貫して意識している事、意識させられる事は、「同じものを”繰り返し“つくる」という事に対する難しさです。自動車業界、その部品製造業である私たちの世界では、「一つのものをたくさんつくる」という事が必要不可欠であり、決めた事を繰り返し、早く、多く、良く、安く、つくる事がお客様からのニーズそのものとなります。その”同じものを繰り返しつくる“為に同じものをつくる「条件」を探す事が私の仕事であります。

しかし、試作をして良いものがつくれても、”偶々な“ものづくりであり、「同じものを”繰り返し“つくる」となっているかというと、そうならないのが難しい所。新たなものづくりを始める度に、トライ＆エラーを何度も繰り返し、その度に「なぜ？」と考えさせられ、対策を練り、またトライを行う。その結果、何とかものづくりは確立してゆく事ができますが、唯ひたすらに失敗という経験を積み上げてのものづくりとなっていたこと、遠回りになっていたことに気づかされます。

もちろん経験することは”成功“はもちろんですが、”失敗“も「成功の基」と言うように、大切であると理解しています。そしてその積み重ねで「経験と勘と度胸」が養われ、新たなものづくりに結び付いてゆくのだと思いますが、やみくもな経験は遠回りになってしまいます。そうならない為にも、その遠回りの前に、ものごとを始める前に、基礎を知る経験をする。広く浅く知る、学ぶ。そしてなぜそうなるのか？と疑問を持ち、興味を持ち、理論を、原理・原則を学んで改めて”実践経験“を

原則を学んで改めて〝実践経験〟をするのが一番大切であると言うことがわかりました。その一番の大事な事を、ものづくりの〝基礎〟を学校は教えてくれていた、と今更ながら振り返って気づかされる次第であります。

新たなものづくりを創造できる人、地域のものづくりを、日本を、そして世界のものづくりを支える人、それぞれを志して励んでほしいと、後輩たちへの期待を込めて、当たり前の事ではありますが、私の〝遠回りした経験〟のご紹介となりました。最後まで上手くまとまりませんが、私のものづくりの原点である太田工業高校、その益々の発展と、同窓会各位の皆様のご健勝とご多幸祈願致しまして、ご報告とさせて頂きます。

大泉支部設立にあたり

支部長　川島　定夫（6E）

前略、卒業して四十七年、初めて参加した平成二十七年度総会の懇親会において、顔見知りの方が参加されていました。名前もわからず軽く会釈をする程度でしたが、歓談の中で大泉町内の三年先輩植松（3C）さんと知り、より一層の親近感を感じたことを憶えています。同窓生っていいですね！

植松さんのことをもっと知りたくなり、友達に聞いたところ中学校時代の同級生の兄さんとわかりビックリしました。植松さんも大泉支部設立の世話人として参加していただいています。

今回の懇親会の中で同級生二名（6E）が参加しており、クラス会の話がでました。現在進行中であり、テーマはS45 06E65（昭和四十五年卒業六期電気科六十五歳になる）と決まりました。

今回、大泉支部設立にあたり、私の六十五年の人生の中で今が一番いそがしく、充実しています。支部設立については、平成二十七年度総会の懇親会で同窓会長に（私事）相談→大泉支部立上げては→近所に同窓生はいるか（同級生＋地域の同窓生探し）→協力依頼ＯＫをもらう→世話人の顔合わせ→平成二十八年度総会で承認され現在に至っております。

大泉支部はどのような事をするか具体的な行事等はありませんが、目的として「母校を愛し、同窓生の親睦・情報交換・助け合いの精神を基本とする」を掲げ進めていきます。

また、太工同窓会報第三十五号の発行に際しまして、大泉支部の先輩三名の方に寄稿依頼することができました。本当にありがとうございます。

定年後の人生を楽しんでいるところに、大泉支部を立上げましたので、同窓会報にのせる記事の作成依頼と先輩方々に大変な思いをさせてしまいました。

今後は、太工同窓生皆さんのご指導を受けながら大泉支部を発展させていきますので、宜しくお願いします。

おわりに、母校の発展と同窓会総会に多くの方の参加をお願いしまして、大泉支部設立の挨拶とします。

大泉支部世話人
初顔合わせ
（平成二十八年
四月二十三日）

大泉支部の皆さん　ご意見・ご要望は下記まで
問合せ先：大泉支部長　川島定夫
TEL/FAX :0276-63-3503
携帯電話:080-5458-4919
E-mail:kawashima-g743360@tk2.so-net.ne.jp

本部役員退任にあたって

五十嵐　一二三（10C）

この度、定年を迎えるにあたって、太田市役所在職ＯＢの立場から務めて参りました本部役員を退任することになりました。

就任したのは平成十一年度からで、十七年間務めたことになります。

就任時の卒業生総数は八千人位と記憶しておりますが、現在は一万二千人を超えており非常に感慨深いものがあります。

心に残る思い出は、同窓会ホームページの開設を行ったことで、同窓会報を創刊号から閲覧することができ、最近の活動状況も知ることができますので、是非ご覧になって下さい。（太田工業高校同窓会で検索すれば、見つかります。）

また就任当時、同窓会総会は校舎内にて総会のみの開催となっておりましたが、多くのＯＢ参加を目的として、一部総会・二部懇親会形式になったことも重要な出来事でした。

これによって毎年総会の場で参加ＯＢ一同近況を語り合い、種々の情報交換ができますので、参加したことがない方、是非参加してみて下さい。（例年七月頃開催、詳細は事務局へお問い合せ下さい。）

他に在職時の思い出として、一九八三年（昭和五十八年）甲子園に出場したときのことですが、大応援団による車中泊トンボ帰りの遠征に、私も添乗員として参加しました。

道中の高速道にて事故が発生渋滞し、甲子園球場に到着したのは既に初回攻撃途中で、あの天下の池田高校を相手に先制点をあげた最中であり、興奮の渦が巻き起こっていたことを今でも懐かしく思い出します。

さて、平成二十八年三月三十一日にて無事に定年退職となりました。以前から定年を迎える諸先輩が「大過なく無事に定年を迎えることができた」と言っていたことを大袈裟な言葉と思っておりましたが、いざ自分自身が定年を迎えるに当って、全く同感であることに驚きました。

この言葉の意味は、自分や家族や職場環境にて、大病や事件事故に遭う事無く、無事に定年を迎えられたことの意義が込められたものであること、しみじみと感じております。

あっと言う間の四十二年間でしたが、これからが人生の総仕上げであり、太田工業同窓会につきましても陰ながら支援して参りたいと思っておりますので、皆様宜しくお願い申し上げます。

同窓会本部役員の退任にあたり

吉田　伸也（11M）

同窓会員の皆様お元気ですか、思い起こせば太田工業高校が甲子園に出場した年に太田市役所の職員で天神同窓会が発足しました。その後、天神同窓会のメンバーの中から代表が本部役員の一員となり、私も引継ぎを受け十四年間務めさせて頂きました。

本部役員会に出席した時は、初めてお会いする人ばかりで緊張していたことを覚えています。議事が進む中で、在校生の教育活動や卒業した同窓生の活躍に対して、同窓会として、どのように取り組むかなどを真剣に検討している姿に自分が本部役員として務まるか不安を感じながらその場にいたことを思い出します。

同窓会入会式、文化祭への参加や総会では多くの卒業生の方々ともお話をする機会があり、たいへん有意義な時間を過ごすことができました。これからも支部組織の設立など、同窓会の発展を陰ながら応援してまいりたいと思います。

同窓会の方々の健康とご多幸を祈念し、退任のあいさつとさせて頂きます。

同窓会本部役員に就任して

岡田　秀一（18E）

平成二十八年度より、同窓会本部役員を仰せ付かりました昭和五十七年度電気科卒業の岡田でございます。新人の為、先輩諸兄の御指導を頂きながら太田工業同窓会が一層盛り上がる様、微力ではございますが頑張って参りますのでどうぞ宜しくお願い申し上げます。

早いもので卒業してから三十五年の歳月が過ぎようとしております。よって私は現在の校舎ではなく、内ヶ島町にあります校舎を卒業致しました。近くを通る度、三角屋根の体育館と男臭い校舎で学んだ三年間の思い出が甦り、あの頃の自分を思い出します。残念ながら現在校舎はありませんが、卒業生全員、確かに心の中に生き続けているのではないかと思います。今五十三歳、一日一日を大切に生きて行かなければと、時の早さに教えられます。

私は太田工業卒業後、専門学校に入学し地元の電気メーカーに就職致しました。その後幾度かの転職があり、三十才の時現在の会社を設立する事となりました。起業してから今に至るまで決して順調ではありませんでした。軌道に乗るまで五年位かかりましたが、その後も失敗を繰り返しながら学び色々な方々との出逢いにより助けられ、〝続ける、諦めない〟という精神だけで現在まで走ってきました。失敗しても逃げずに頑張り続ける、まさしく禍を転じて福となす、と云うことでしょうか。お陰様で設立から二十三年が過ぎました。自分自身の経験、特に失敗から学んだ事から、会社スローガン、経営理念を作り、社員一丸となって、三十年を目指し走り続けている所であります。

私はこの度、五十六周年記念日の講演を仰せ付かり、この様に私自身の生きてきた経験を生徒の皆さんにお話しをさせて頂きました。私自身も時間を止めゆっくりと振り返る事で忘れかけていた自分を思い出し再確認する事が出来ました。この様な機会を頂いた事に心から感謝致します。そして生徒の皆さんの今、未来に少しでも参考にして頂ければ幸いです。最後まで御静聴頂きましてありがとうございました。

五十才を過ぎ歳を刻む程、母校に対する思い出が甦り愛着を増す様になります。私は今年から同窓会本部役員という立場を頂きました。一人でも多くの卒業生の方々が総会に参加して頂ける様、積極的に呼びかけて行こうと思いますので、御協力の程宜しくお願い致します。

結びに、今頑張っている生徒諸君に心からエールを送り、校長先生をはじめ先生方、同窓会の皆様の御健勝と太田工業の益々の発展を祈念致しまして就任の挨拶とさせて頂きます。

同窓会本部役員になって

尾島　剛（24E）

昭和六十三年に卒業してから、早いもので二十八年が過ぎました。月日が経つのはとても早いものです。

縁あって、母校に足を運ぶようになりました。とは言っても、なぜか母校という感じがしないのです。私が通っていた母校は、内ヶ島町、現在のぐんま国際アカデミー中高等部の場所にありました。

平成元年に茂木町に引越し、私たちがあの校舎での最後の卒業生ということになります。

茂木町の校舎には、一度も入ることがありませんでした。だから、母校という感じがしないのです。

卒業して数年程経ったある日、内ヶ島町の校舎に立ち入る機会がありました。誰もいない校舎、懐かしさと共に寂しい気持ちになったことを今でも覚えています。

ここに売店があって、ハムカツを買った。この部屋に旋盤が、ここで製図をしたなぁと。恩師はどうしているだろうかと・・・。

デジカメも無い時代、また、写真も撮っていないので、記憶の奥底から蘇らせていました。

その後、母校との関わりもほとんど無く、二十数年が経過した昨年四月、職場の先輩から同窓会本部役員の話が舞いこんできました。

先輩は、今年三月で定年退職を迎えます。そんなきっかけから、今年度の総会で、本部役員の会計を仰せつかりました。

総会では、同じ学び舎に通っていた先輩方から当時の話しを、そして、先生方から、世話になった恩師が元気でいることを教えていただき、心の中にあったトゲが一つ取れたように感じました。バイクとサングラス、それから竹刀が強烈だった恩師、今も教鞭をとっているようです。

母校との関わりが少しでもあることは、これからの人生において、とても有意義であることは間違いありません。同窓会員の皆さま方におかれましても、引き続きお力添えの程、よろしくお願い申し上げます。機会があれば、同窓会ホームページもご覧になってみてください。

最後になりますが、同窓会本部役員として、精一杯務めさせていただきます。

また、同窓会役員を退任する五十嵐さん、吉田さん、長い間大変お疲れ様でした。

同窓会役員

備前島　達也（31M）

早いもので、私が卒業してから二十二年になろうとしています。人の縁というのは不思議なもので仕事を通して同窓会本部役員のお誘いがありました。卒業して以来久しぶりの門をくぐりました。校舎は当時とほとんど変わっておらず、と言っても私自身は新校舎に移ってから入学しましたが、それでもタイムスリップした感覚でした。本部役員の大関会長をはじめ多数の先輩方のお力になれることを光栄に思います。初めての役員で右も左も分からず、足りない面も多々あると思いますが、ご指導よろしくお願いします。総会では、久しぶりにお会いした恩師や数多くの先輩方と楽しく談笑することができ、懐かしさを感じると共に昔の思い出話や近況報告、他、皆様の活躍などを聞くことが出来て大変貴重な時間を過ごせました。

さて、何を書くか考えましたが、高校時代の自分を振り返りたいと思います。平成五年四月に太田工業高校機械科に入学しました。当時、私は将来の目標もありませんでした。生徒数も定員割れしていましたし機械が好きで入ったわけでもなく、成績も良くもなく悪くもなく、部活動をやっていたわけでもなく淡々と毎日を過ごしていました。先生方にもご迷惑をかけていた面もあったと思います。担任であった桒原先生が教頭先生に就任されていたのは驚きでした。私自身卒業して機械の知識や経験を数多く学びましたが、一つだけ後悔したことがあります。それは、部活動をしていなかったことです。現在、私は太田市内で勤務しています。営業をしているので母校の横を通る時があり、後輩たちの活躍が記された横断幕を見ます。それが嬉しい半面、羨ましくも思います。仲間と喜びや悔しさを共に分かち合う部活動は心身ともに成長しますし、一生記憶にも残る思い出だという事を卒業してから気付きました。今後は役員として後輩たちの活躍を応援させていただきます。

最後になりますが、同窓会役員を引き受けるにあたり創立して半世紀、受け継ぎ、受け継がれてきた歴史と伝統あるこの母校をこれからも微力ながらもお力添え出来れば幸いです。

第一期生〝古希を迎える〟

矢嶋　昇（1M）

昭和三十七年四月第一期生は、まだ校舎もない中、太田市鳥山にあった金山女子高等学校の跡地で入学式を迎えた。昭和四十年三月卒業となり、それから早や、五十二年が過ぎようとしている。今年一期生は〝古希〟と言う祝いの歳となる。

古希とは辞書を見ると、杜甫の詩句の中に〝人生七十年古来稀（まれ）なり〟七十才の別称とある。現代に於いては稀ではない。

先日の新聞によると日本人の平均寿命は、男子八十才、女子八十七才の長寿社会である。今日の様に人生を謳歌できているのも学生時代に鍛えられた〝体力〟と、恩師に教えられた〝気力〟と〝知力〟のお陰と感謝している。

思い起こすと「明日の体育の時、皆鎌を持ってこい」と先生よりの指示。教室に〝エー〟の声がどよめいた。内ヶ島に完成した校舎の校庭は草が一面に生え荒れていた。体育の授業を始める前に草取りから始めたことを、今では懐かしく、いい思い出……いや苦い思い出の一つである。

幸いにも今は健康であり地域の方々と共同農園を耕し、春にはジャガイモ、夏にはスイカ、秋にはソバ・落花生を作り楽しんでいる。ジャガイモ・スイカは夏祭りのカレー、スイカ割り。秋には勤労奉仕をしてくれた人達とソバを打ち食べる農耕民族となっている。

でもこの遊び心が地域の人達のコミュニケーションの場となり、地域の行事にも積極的に参加してくれる人が多く、地区役員として、感謝しています。

同年代で仕事をリタイアする人が多い中、縁あって、ゴルフ仲間の恩師の紹介で、町の施設に一日置きに勤務させて貰っています。

これからの長寿社会にあっては、健康な高齢者は、あらゆる社会を見つけ、社会奉仕（ボランティア）を考えないとならない時であると考えています。

この様な時に「太工・大泉支部」が発足できたことは、まことに嬉しく思います。同窓生一同が、よりよい人生を送れる様、大泉支部の発展を祈っています。

〝古希を迎える一期生より〟

大泉支部結成について

大塚　稔二（2C）

この原稿を記する事になったのは六期生で大泉町町議「川島氏」が突然、自宅に来て大泉支部を結成したいのですが、大泉町には一期生の化学卒業生はおりますが、二期生の自分に白羽の矢が来た次第です。

卒業してから約五十年と歳月が過ぎ気がつけば六十九才になってしまいました。内ヶ島校に二期生として入学したのが走馬燈のように蘇ってきます。工業化学科に入り実験室で悪態をして工場裏側の空き地に一メートル真角のゴミを入れる穴を掘らされた体験が一番のほろ苦い思い出になっております。

東京三洋電機に十年間勤務して三十才の時に邑楽町でレストラン「ウエスターナ」をオープン致しました。最初の三ヶ月程は無給の時もありましたが、三年目にして太田市に二号店をオープンしました。しかし食事時間は両店共にピーク時間が重なり両方の店長を兼ねていた自分は大変でした。両店共に駄目になってしまうという事で五年間で太田店は閉店

しました。

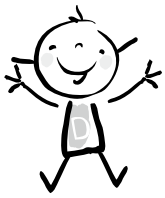
それから約二十年邑楽町店を経営しましたがバブル崩壊と共にコックさん達に退職金が払える状態で閉店しました。そしてこれからはコンビニの時代だと「ローソン」と契約をして約一ヶ月間夫婦して御殿場の研修センターでオーナー研修を受け平成七年に「ローソン邑楽篠塚店」をオープンさせました。約五年間営業して順調な売上を出していましたが、三洋電機の下請けの親会社が倒産してしまい、店はローソン本部が身請けの形で夫婦で身を引きました。

五十五才で失職しましたが幸いにも一週間で派遣会社から部長としてスカウトされて、五年間勤務しましたが、その会社も倒産してしまいました。

大泉郵便局で配達の募集があり合格しました。三年程経てある夏の日事故に合い左肩を完全に骨折して六ヶ月の休業になりました。バイク事故は駄目と友人や親戚の説得で退社しました。

六十九才の現在は「大泉町文化むら」で臨時職員として働いております。空いた時間に百坪程の畑を借りて野菜を作っています。夏は毎年雑草との戦いです。それが健康を保つ糧と信じて病気になるまで挑戦するつもりです。

最後になりますが太田工業高等学校同窓会の更なる発展とご活躍を祈念いたします。



定年後の生活

内田　光男（3E）

突然の訪問を受け太田工業卒業生の、と切り出され「同窓会名簿か」と一瞬疑った。最近名簿類が悪用され拒否反応が？名簿なら断ればいいかと軽い気持ちで対応。すると「太田工業高校卒業生の大泉支部を作る」とのことで原稿を依頼された。今まで学校とは疎遠で何を書いたらいいかわからない。とりあえず現在の生活状況や心境を書こうかと決めました。

今はリタイアして余生を「自分なりに楽しく健康に介護保険の世話にならぬよう」するのが私の務め（国への奉公）と考え日々の生活をしております。

現在、会社ＯＢ会の役員として週一回の会議と、月の第一、第三金曜日金山ハイキングをしています。また、ＯＢ会の下部組織「山遊会」のまとめ役をして偶数月にバスハイクを実施し、また奇数月は「太田あすなろ山の会」のバスハイクと、月に一度はハイキングをしており何かと忙しい毎日を過ごしています。普段は週二～三回金山に行きトレーニングをおこない行けない日は家の近くを四～五㎞歩くようにして頑張っております。

また、個人山行として夏場、普段行けない遠くの百名山を登っています。例えば三年前は六座ある九州の百名山を登り終え、坊がつるの法華院温泉に泊まりミヤマキリシマの咲く久住山や大船山・由布岳を登ってきました。残念なことに久住山周辺のミヤマキリシマは尺取虫？に食われ全滅して見る影もありませんでしたが由布岳はミヤマキリシマが山一面に咲き今も思い出として残っています。一昨年は北海道五座を、昨年は残り四座と北アルプス四座を登りました。北海道へは新潟港からフェリーで十七時間かかりますが翌早朝四時に小樽港に着くので一日が有効に使え便利に利用しています。船中は風呂や映画やイベントがあり楽しく過ごし寝て起きると小樽です。少しリッチな気分が味わえます。

北海道の百名山でどの山が良かったかと聞かれると「トムラウシ」と「幌尻岳」と答えます。長いアプローチを登り終えるとお花畑や池塘のある日本庭園に出ます。山頂で見た旭岳や十勝岳等の眺望は今も忘れません。自然が作った絶景です。また、昨年登った幌尻岳は三度目にして念願だった七ツ沼カールに行くことができました。七ツ沼カールは熊の楽園と言われヒグマが出没して危険なところですが幌尻山頂から見る七ツ沼はどこか神秘的で一度は行って見たいところでした。幌尻山頂から七ツ沼カールへ下り、また蔦別岳へ登り返し中蔦別岳から幌尻山荘へと下る一周コースです。十三時間ほどかかりましたが念願がかない最高の喜びでした。

現在私の生活は、山を中心に据え、健康を維持して長く全国への山旅ができる様頑張っています。

社会人一年目

工藤　大樹（45M）

太田工業高校を卒業した当初は、介護職に就くとは考えもしていませんでしたが、気が付けば、今年の三月に医療系の専門学校を卒業して、介護福祉業界に就職していました。私の祖母が認知症になってしまったのをきっかけに、認知症患者に対する介護の在り方を学びたいと思いまして、介護福祉業界に興味を持ち、現在「機能訓練士」としてデイサービスセンターで働いております。

私の業務内容としましては、病気や怪我、高齢などを理由で身体に障害を持つ施設利用者様に対して、歩行訓練・マッサージ・筋肉トレーニングなどを取り入れた計画書を作成し、日常生活を営む為に必要な機能を改善、または現状の能力の維持や減退の予防のために個人個人に合った訓練を行っております。

施設では、廃用症候群（寝たきりや行き過ぎた安静状態が長く続くことで筋肉や関節が萎縮してしまうこと）や認知症になってしまった方々が多数入所しています。訓練を行う際、まず私が「このように体を動かして下さい」とジェスチャーを交えた手本を行います。その後に利用者様に行っていただくのですが、「実行する意思があってもできない」「内容に対しての理解力がなく、その動作どおりに行う事ができない」という状態の方々がいます。また、訓練自体を拒否されるケースもあるので、利用者様の安定した身体機能の獲得の為にも何とかやっていただこうと、

説得の方法なども試行錯誤しながら業務に従事しております。その他には、排泄や食事、口腔ケアなどをご自身で行えない方々に対しての介助業務もさせていただいております。老化の影響で多機能に渡っての身体能力の低下、脳卒中の後遺症で半身麻痺が残り生活に支障が起きてしまっていることなど、今の私の身には起こってはいませんが、これから年齢を重ねるに連れてそのリスクは高まる一方です。「明日は我が身」と言っては少々、二十代の私の年齢では言い過ぎかもしれません。ですが、いずれは行く道と捉え、他人事ではないという事を念頭に置きながら、これからも真摯に訓練、介助させていただこうと思っております。

諸先輩、恩師の皆様、お待ちしております。

編集後記

第三十五号発行にあたり、多くの方にご支援を頂き厚く御礼申し上げます。

今回、本部役員となり編集長の役職にプレシャーを感じながらも発行できた事に満足しています。

同窓生の皆さん、新しい発見と出会いを求め、そして思い出を語り合える仲間と一緒に同窓会総会に参加してみませんか。毎年七月を予定しています。

『同窓生っていいですネ』

（川島記）

進路指導部より

進路指導主事　吉田　浩巳

進路指導部から、今年度の生徒の進路選択状況について報告いたします。

就職および進学の比率はこの七年間、ほぼ同比率で推移しており、今年度の就職者は一二二名、進学者は七十三名となった。

就職に関しては、下図のグラフが示しているように、群馬県内は二三五社、県外は四二六社の企業から求人の案内をいただいた。企業の求人意欲の高まりの反面、求職者の減少傾向による売り手市場と分析されている。動向は以下のとおり。

①欠席の少ない生徒、元気で明るい生徒は例年どおり好まれる半面、成績は優秀だが、内向的な性格（自分の考えをうまく伝えることができない等）の生徒は不採用となる傾向が見られる。

②県内においては製造業（特に自動車製造関連企業）の求人が主流

③太工生の就業地は県内が全体の八十三％（内、市管内が全体の五十％）である。

④産業分類では製造業に八十三％、職業分類では生産工程従事者が六十六％となっている。

⑤公務員関係は防衛省（自衛隊）、警視庁、消防が主流となっていて、行政職等は希である。

進学については以下の動向が特徴となる。

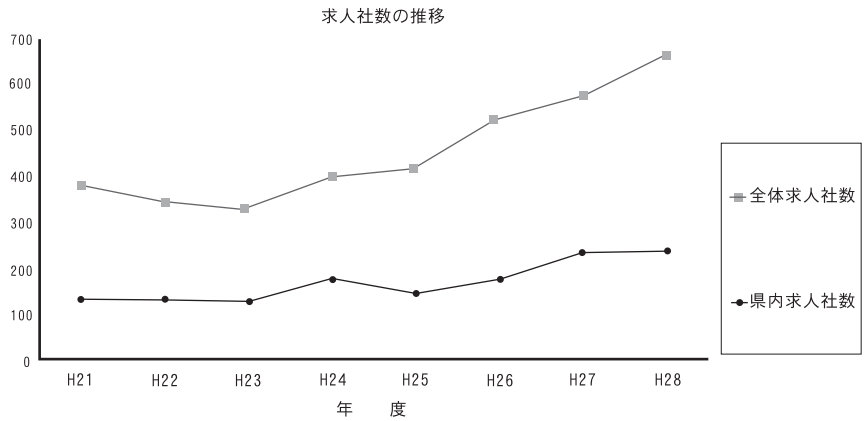
①四年制大学の進学者は、その七十三％が工学系に、専門各種学校の場合は、その六十％が工業系に進む。

②少数ではあるが、国公立大学の合格者も出ている。（群馬大学、高崎経済大学　等）

③私立大学については、年度によって日本工業大学、埼玉工業大学のいずれかに偏る傾向がある。

④入試方法は、四年制大学では指定校推薦が主流。近年、ＡＯ入試でのチャレンジも増加している。

⑤入学試験に際して、志望動機や小論文に大きなウェイトが置かれている。日頃から文章に慣れ親しむ事が重要になっている。



－同期会・クラス会を開きませんか？－
たのしい、うれしい、なつかしい思い出
あの人はお元気かしら・・・・・
いつでもご相談ください
幹事様の面倒な準備作業
すべて代行いたします
株式会社同窓会事務局
TEL 0120-10-9870
FAX 0120-15-3460

同窓会ホームページ

ホームページURL
http://www.takou-ob.jp
メールアドレス
m-charge@takou-ob.jp